

物語の受容

——芥川の「再話」をめぐる——

松浦俊輔

小論は、芥川龍之介の△芋粥▽および△藪の中▽を例にとつて、語るということの内実の一端を捉える試みである。既に多くの論評のあるこの素材をなお取り上げるのは、次のような理由による。すなわち、今日、人が何らかの情報を獲得しようとするれば、他人の言葉、つまり何らかの物語に依存する

場合が圧倒的になっているという実情から、物語を通じてのコミュニケーションという日常的な場面の構造を検討しておく必要があると思われる。こういう問題を考える際、再話という手法が、物語を受け取り、さらにそれを語り直すという、物語によるコミュニケーションの基本的な構造を顕現しており、素材として適切であろう。しかも△芋粥▽や△藪の中▽は、典拠とされている物語とは趣の全く異なる物語であり、極端な例であるだけに、語り手の色づけあるいは意図を鮮明にしていると思われ、例題として取り上げるのにふさわしいものである。素材としては古くとも、眼目は、再話とい

う形であらわになる、物語という行為が含む問題を抽出することにあることを、予め断っておきたい。

周知のように、△芋粥▽は『今昔物語集』(以下『今昔』と略記)巻二十六中の△利仁將軍、若き時京より敦賀へ五位を將て行く語第十七▽、△藪の中▽は同集巻二十九の△妻を具して丹波国に行きたる男、大江山にして縛らるる語第二十三▽をそれぞれ主な取材源としている。しかし実際には、人物設定、話の進行といった点で、全く別の物語を創作しており、とくに△藪の中▽については、「再話」と呼ぶことさえためらわれるほどである。しかしこれらの原話が、芥川の物語に対するきっかけになっていることは疑いなく、芥川はいわば、同じような舞台で起こりうる他の物語を語っている。とりあえず、個々の作品について分析を加えておこう。

△芋粥▽は大正五年の『新小説』九月号に発表された、事

実上の芥川の文壇デビュー作である。既に、『新思潮』に発表した「八羅生門」や「鼻」で、『今昔』に取材した物語を書くことは試みられており、手なれた手法で文壇に臨んだといえよう。こういう素材を用いるのは、芥川自身の言に従えば、あるテーマのために必要な「異常な事件」が起こってもおかしくない時代、即ち「昔」に舞台を求めるといふことになる。おそらくこのあるテーマのために必要な異常な事件という発想は、芥川における物語という行為の根幹をなすものであろう。しかし、芥川が言う「テエマ」というのは、畢竟、物語を通じて見聞した事件を語ること、つまり、ある「事件」から、どんな物語が可能かということではないのかということとを筆者は見るつもりである。その際、一般に言われる作品のテーマ、主題というのは、ある「事件」を語る上での方針にはなっているであろうにしても、物語という行為を支えるものではなくるのである。

さて、原話は、先に挙げた表題にもあるように、敦賀に根拠を持つ地方豪族、藤原有仁の婿、藤原利仁の若い頃のエピソードとして語り始められる。その利仁が仕えていた、時の摂政藤原基経のもとに、利仁より長く勤め、それ相応の位置にいたのが実際の主人公五位である。この五位が、宴席から「下がり物の芋粥を食べて、「いかで芋粥に飽かむ」と言ったのを利仁が聞きとめ、数日後、五位を領地の敦賀へ連れて

行って、大量の芋粥を用意してふるまい、五位は「一盛だにえ食はで、飽きにたり」と言うことになる。しかし五位は、この敦賀に一月ばかり滞在し、「万づ楽しきこと限りなし」という歓待を受け、一財産を与えられて都へ帰るといふ話である。この話が収められている巻二十六は、いわゆる宿報譚を集めており、この話も「実に所に付て年来になりて免されたる者は、かかることなむ、おのづから有けるとなむ（実際、一つ所で長年勤め上げて認められれば、自然とこういうこともあるものだ）語り伝へたるとや」と結ばれている。つまり、この話を採録した者は、これを果報を得た話として伝えようとしているのである。

この原話をどういふ話と解するかということにも立場の相異がある。歴史的に見れば、新興の土着勢力が、経済力において都の貴族を凌駕していることを見せつけたというような解し方もありうる。確かに客観的にみた力関係としては、当時そういう状況があったであろう。しかしそういう解釈ができるのは、当時の状況を鳥瞰しうる立場にある者のみであって、この物語が採録者にまで伝わる約二世紀の間、ずっとそういう話として伝わったわけではないだろう。ただ、制度的には上位にあるはずの五位が、一介の地方武士にすぎない利仁に、経済力や動員能力（狐までもが利仁帰国の使者として動員された！）を「見せつけられた」ということに、有仁や

利仁の家人、領民が、地縁的な共感を抱いて喝采を送ったということはありうる。また、そういう地縁とは無関係であっても、都の人士たる五位のみずばらしさや、なす術もなく利仁に引き回される姿を嘲笑することはできたかもしれない。

しかし、果報をうけた話とする原話の立場とは別にこうした背景を読みとるのであれば、当時の状況として、さらに別の様相を見ることも可能である。侍の身で敦賀にいたることの多い利仁⁽⁵⁾にしてみれば、都の権力者基経への窓口となりうる人物を厚くもてなしたわけだし、また、気前のよさという領主の美徳を示したのである。他方、五位は五位で「楽しきこと限りなし」と言われる歓待をうけた上に、一財産贈られたわけで、おそらく五位なる人物は、それを当然のものとして受取ったであろう。また、五位は帰京して敦賀藤原氏の利用価値を基経に報告したことであろう。侍が文字通り侍でしかなかった時代の話と考えれば、それぞれがそれぞれの思惑で動き、どちらも決して損をしたわけではない。「今昔」が編集された時代にもなれば、武士は歴然たる勢力をもつものとみなされていて、それ故、この話を採った者には、新興勢力の経済力の大きさを感ずることもできたというものはありうる。それでも、この話を採る以上、それは果報を受けた話として語られなければならなかった。もしこの物語で、損をした者があるとすれば、結局は使いを勤めた狐にふるまわれ

ることになる芋集めに駆り出された領民に他ならないからである。芥川がこの物語に取材することになる基盤は、決してこの物語の歴史的な解釈ではなく、多くの者にとってハッピーエンドになりえない物語がハッピーエンドで処理されているといった奇妙さになければならないのであるが、ひとまず原話の性格をまとめておこう。この話は、新興勢力ではあるが制度上は取るに足らない地方の土豪が、中央とのパイプを強めるために、圧倒的な経済力で中央有力貴族の家人をもてなすにあたっておこった「事件」が、おそらく利仁側の家人を通じて伝わったものである。

このような原話を、芥川はどう語り直したかを見ておこう。まず五位は、基経の家での同僚や、果ては子供にいいじめられている兎犬を助けようとして、その子供にまで馬鹿にされる、貧しくみずばらしい家人として詳細に描写される。この五位は常々「芋粥を飽きる程飲んでみたい」という願いをひそかに抱いており、それをある宴席でふともらしたのを利仁に聞かれて、あっさりその願いが実現することになる。宴から数日後、湯に行こうと騙されて連れ出され、そのまま敦賀へ連れて行かれ、長年の夢がこんなに簡単に実現していいものかという不安を感じつつ寝ている間に、用意された芋が、「五斛納釜を五つ六つ、かけ連ねて」煮られているのを翌朝見たとたん、食欲を失くしてしまう。もう食べられぬと固辞しているところへ、

利仁が帰国途中で使者に送ったとおぼしき狐が現われ、芋粥はこの狐にふるまわれる。物語は、それを見ている五位が、人々に愚弄されながらも、芋粥に飽きたいというささやかな希望は持っていた、かつての「幸福な彼」自身を思い出すうちに、寒さにくしゃみをするという形で閉じられる。

このような五位と利仁をめぐる「事件（＝物語）」を必要とするような、芥川言うところの「テエマ」とは何だったのか。この点についても、種々見解がある。和田繁二郎や関口安義は、芥川の描く五位を「貴族たちの中にひそむ人間の兇悪」に「いためつけられている民衆の象徴」⁽⁶⁾ないしは「しいたげられ踏みにじられている貧しい民衆のひとり」であり、「芥川自身のまわりにいた多くの悩める人々の群のひとり」⁽⁷⁾とみなしている。特に関口は、「五位の男の弱さとまわりの人々の悪意を通し、人間存在の本質的な問題に迫」ろうとするものとして⁽⁸⁾いる。

人間存在の本質的な問題というののもっともであるにしても、五位を民衆の側におくこれらの見解は、にわかには受け容れ難い。確かに芥川も、五位を貴族の貧しい家人として描いている。むしろ原話以上に、と言ってもよい。しかし、芥川による五位像の焦点は、貧しさにあるわけではない。撰関、太政大臣の家に仕える家司が五位相当とされるからといって、この五位がそれだとも思えないが、原話も芥川も、五位自身

が下人を持つ身分であることを伝えている。芥川自身はそういったことにさしたるこだわりを見せているわけではない——舞台を借りるだけのことなら当然であろう——が、五位を貴族対民衆という図式に沿って民衆の側に置くつもりなら、五位という貴族側にあることを暗示するような呼称を用いるのは適切でない。△羅生門▽では、髪を抜かれる死んだ女の身許を、『今昔』中の他の話に拠って書いた芥川であれば、もっと適当な名を見つくりうくらうことはしたのでないだろう。しかし、五位が民衆の一人として描かれていないからといって、明確に貴族の側に置かれていくわけでもない。五位という名が不自然な程、貴族らしくない人物である。つまり、芥川は貴族対民衆という図式に則っているわけではないということである。五位と呼ばれる人物を登場させ、この人物が、徹底して侮蔑されるしかないあわれな人物であることを執権に示すのであって、貧しさあるいはみすばらしさは、その一環でしかない。

逆に利仁の方はどうかといえば、これも兇悪な貴族ではない。三好行雄は前記の和田説に反論する形で次のように述べている。

五位を敦賀まで連れだしたとき、かれ（＝利仁、引用者註）の△悪意▽を推測するに足るという描写も見当らぬ

のである。だいいち五位を嘲弄し、侮蔑するために、利仁はなにも敦賀まで連れだす必要はなかった。五位は都大路で、すでに負け犬である。自分の力を誇示する勝ち犬の、子どもらしい自尊心と、ひとをたばかって喜ぶ、これも子どもらしい悪戯心とが、利仁を動かす動機のすべてであった。いうなれば、勝ち犬の恣意である⁽⁹⁾。

三好はこのように利仁像をとらえ、△芋粥▽の構造を「勝ち犬」と「負け犬」という図式で表現する。そして、勝ち犬がいるかぎり負け犬が存在することになる「世の中の本来の下等さ」⁽¹⁰⁾を開示することを芥川の主題とする。

△芋粥▽を勝ち犬と負け犬の対比でとらえ、利仁の行為を「勝ち犬の恣意」と見ることは、貴族と民衆の対立でとらえるよりは説得力をもつ見解である。芥川自身が「世の中の本来の下等さ」に言及しているのであれば、それを芥川の主題としてもいい。しかし、その主題と原話とは、どのようにつながっているのだろうか。

勝倉壽一は三好説に疑問を呈し、「本篇は、当事者の間では強く認識されない軽微な悪戯によって、生そのものが破壊されてしまうところに、加害・被害の本質的な関係を見、被害を正面から主張し得ない柔弱な五位像の中に人生の意味を問いかけて⁽¹¹⁾いる」とする。勝倉によれば、三好説のように利

仁が勝ち犬の恣意や倨傲あるいは悪意で五位をなぶりものにしたのなら、五位は悲劇の主人公となりうるが、五位の切望した「芋粥に飽かむ」ことをかなえようとする行為である以上、五位は怒ることも泣くこともできず、ただ寒さにくしゃみをするだけで終ってしまふ。この悲劇にすらならない「近代の人間関係のどうにもならない惨めさ、下等さ」を芥川は見ているということになる。勝倉は三好の言う勝ち犬の恣意や倨傲までを否定するわけではない。「利仁の加害の大きさとその人間の下等さは、むしろ利仁が恣意や倨傲の害に自ら気づくことなく、しかも、五位との人間的な格差を確認して満足を得ようとする浅薄な虚栄心に発する悪戯が、憐憫と好意の中に許容されると自認している点にある」と言うのである⁽¹²⁾。

△芋粥▽の利仁にこういう心理を想定することはできない。五位は五位で、利仁の行為を厚意によるものとせざるをえないことも理解できる。そしてこの五位と利仁との関係が、「近代」のそれであることも、勝倉と三好が軌を一にしている⁽¹³⁾のであれば、そこにあえて異をはきむつもりはない。小論は△芋粥▽の主題論を目的とするのではなく、ここに挙げたような様々な解釈をもたらす、物語というものが生じる場を見ることがある。

芥川がその「テエマ」を託した、その頃ならあってもおか

しくない「事件」は、意外なことに一つしかない。それは利仁が五位を連れて敦賀に向う途中で、利仁帰国の使者として狐を使ったことである。「芋粥に飽かむ」ことを願う五位という人物設定なら、それに類したちっぽけな願いを持つ人間を「現代」に描くことは可能であろう。¹⁴一夜にして「五斛納釜を五つ六つ、かけ連ねて」、食べきれないはずのない芋粥を作ってみせる乱暴な消費は、百円札を燃やして灯りにした成金のエピソードを生んだ頃の大正五年当時では珍らしくもない話であろう。そういう意味では、芥川が描いたのはまさしく「現代」であった。

しかし利仁が狐を使者に立て、この狐が利仁の妻にとりつくという形でその役目を果たすというエピソードを、芥川はわざわざ取り上げ、これも原話とは全く異なる小道具として用いている。原話の五位は、狐が使をするということは信じていない。実際に利仁の家人が出迎えに来て、事情を説明したあとでも「奇異奇異と思たり」と半信半疑である。ところが八芋粥の五位は、あっさり信じている。少なくとも信じたふりをしてみせる。狐の使などという「非合理的」なことを、「現代」の読者はいきなりは信じないだろう。利仁が仕組んだ「悪戯」の一つ、あるいは都に「狐さえ願使する」人物として伝えられることを狙った演出と見るのが順当な反応であろう。五位に芋粥を食べさせる約束をしてから、実際に連れ

出すまでに筋書を実家に指示しておけばよい。原話と違って、芥川は利仁が狐を捕えるシーンをも曖昧にぼかしている。¹⁵利仁がたまたま通りがかった狐を捕えて、それを使に出し、それがちゃんと役目を果たしたということを信じなくてもいいように描いている。当時のことだから、野道で狐が通りかかるのはおかしくない。それを合図に狐を捕えたように五位に見せかければ、あとは筋書き通りと「合理的」に納得できるように描かれているのである。

そういう筋書に気づいているように五位は描かれていない。原話の五位が見せた疑いの片鱗も示さないのである。おそらくそれは芥川の言う「阿諛」¹⁶のうちであろう。五位は芋粥食べたさに、利仁に追従するばかりの人物として描かれる。原話の五位は、この話の聞き手とともに、狐の使の話には眉に唾をつけている。それにより却って、家人の説明に、やはり五位とともに聞き手が、半信半疑ながらも、「おかしなこともあるものだ」程度には納得する効果もあったかもしれない。しかし芥川は、狐の使を信じるのは五位ばかりという構図にした。もし八芋粥に悪意が描かれているとすれば、それは他ならぬ芥川自身の悪意である。そしてその悪意は均しく利仁にも向けられる。原話の利仁は、下心をもってのことであるにせよ、その下心が満たされる——後に「將軍」にまでなる——に値する気前のよさという武人の美德を示してい

る。しかし△芋粥▽の利仁の行為は、単なる成金の遊びに類するものである。五位はその利仁についた幫間といったところであろうか。いや、原話のような祝儀も与えられず、「芋粥に飽かむ」という願いを、それがあっさり叶えられてしまふという形で消されたままに終るのであれば、飼主が飛ばせたシャボン玉を、ボールと思い込んでくわえたとたん、それではじめて途方にくれる「虜犬」といったところであろう。問題は、このような「悪意」をこめて原話を書きかえた芥川の行為の内実である。

清水康次は、芥川の初期の再話作品、△羅生門▽、△鼻▽、△酒虫▽、△芋粥▽などを検討して、次のように言う。¹⁷⁾

原話が矛盾した事態を提供する。事態の矛盾は主人公にとっては価値的な矛盾である。作者はそのような事態を再話し、事態の外から、それを矛盾なく「解釈」してみせる。そのことで、事態の不可視の部分が顕在化される。

ここで言われている「価値的な矛盾」とは、簡略に言ってしまうえば、幸福になれるはずだったのに実際には不幸になってしまうという事態のことである。そしてその「矛盾」が、「作者の認識によって、不可視の部分を顕在化させること」でうまく説明できたとき、「『解釈』という方法が完結」するとい

う。例えば△鼻▽では、鼻が短くなって、もう誰もわらうはずがないのに、何故人はまだわらうのかという「矛盾」があり、作者はそれを、周囲の人々の心にひそむ「傍観者の利己主義」を提示することによって「説明する」という形で作品が成立しているということになる。

ところが△芋粥▽では、この「解釈という方法」が完結しておらず、むしろ矛盾があらわになったところで終わっている。清水はそれを、「解釈」という方法は、「芋粥」において既に後退を見せていた」とみなし、続く再話作品△運▽では、作品内部に観音の霊験を受けた女の話をする老人という語り手を設定するという形をとり、原話に示された事態を外から解釈、説明するという方法を放棄したと見ている。語り手が作品内部に住まうからには、いかに事態が矛盾しているとしても、その事態を生きてゆかなければならないということである。

芥川の再話に「解釈という方法」を見た清水の見解は相応に評価しうる。書くあるいは語るという行為は、明確な「テーマ」なるものに導かれてというよりは、むしろ「テーマ」の手がかりを得た上で、実際に語り進めることによって、その内実が明らかになるような行為ではないだろうか。その点で語ることにその語りを受け取ることとの差はほとんどない。そしてそうだとすれば、例えば芥川にとっては、その手がか

りが原話に示された「矛盾した事態」であるとすれば、芥川における物語という行為の⁽¹⁸⁾内実をとらえる可能性を与えるものとして、清水の見解を見落すことはできない。現に、先に見た狐の使のエピソードの処理などを見ると、むしろ納得のいく話に作りかえるという性向は、芥川には強いように思われるのである。しかし、清水の言う「矛盾した事態」は、決して原話が示すものではなく、芥川の作品において初めてあらわになるものではないだろうか。原話の五位は「芋粥に飽かむ」という、都の人士には似つかわしくない願いをもらすものの、その願いをとまかくも叶えられたばかりか、一財産まで得て、めでたしめでたしで終っている。確かに「一盛だにえ食はで、飽きにたりと云」うのだから、そこを衝けば、「矛盾した事態」とも言いうるのであるが、決して幸福になるはずだったのに不幸になってしまったというような話ではなく、芋粥は、果報を与えられるきっかけとして処理されているのである。むしろ芥川は、原話をあえて矛盾させた⁽¹⁹⁾と見る方がふさわしい。

芥川にそうさせる動機を与える程の不整合があるとすれば、あれ程様々な人間が織りなす物語を集めながら、一話一話に教訓めいた評語を与えて完結させようとする『今昔』⁽²⁰⁾に収められた物語がもつ構造そのものではないだろうか。素材として何を選ぶかということには、「現代」を表現しうるものと

いうような基準はありうる。しかしそれだけなら、素材に登場人物の心理を含めた細かな描写を加えればことは足りるのであって、原話とは別の物語に仕立てる必要はないだろう。芥川にとって原話が「矛盾」しているとすれば、それは主人公にとってのものではなく、これでは幸福になれるはずがないのに、果報者として五位が扱われているという芥川自身にとっての矛盾である。そして芥川は、五位を徹底的にいじめぬくことによって、不幸な五位に書きかえたのである。

原話の⁽²¹⁾とってつけたような評語に対して、こういう話ならありうる、それが人間の世界だという形で別の物語をぶつける、そういう意味での「不可視の部分⁽²²⁾を顕在化させる」というのなら、原話との関係は成立する。しかし、清水のいう「不可視の部分」とは、「矛盾した事態」をもたらず人々の心理の謂に他ならない。それによって、△鼻▽に示された「矛盾」は解決しうるが、△芋粥▽は未解決のまま終わったとする他はなくなる。しかし芥川が求めたのは、原話を受容、⁽²³⁾られる話として語り直すということであり、そういう意味での「解釈という方法」は、△芋粥▽にも成立しているのである。つまり、芥川の再話は、ありうる、ないしは納得しうる物語の構想という方向で成立しているということである。そしてこの方向をさらに推し進めたのが、言うまでもなく△藪の中▽である。

△藪の中▽は『新潮』大正十一年一月号に掲載された作品である。素材となった物語は次のようなものである。妻を伴って京から丹波へ行く男が、途中で見知らぬ若い男から、刀と弓との交換をもちかけられる。それに応じた上に、矢まで相手に渡したため、その弓矢で脅され、縛りつけられた男の目の前で妻が犯される。賊が去った後、茫然自失の男を見て、妻はそんな情ないありさまでは、頼りにならないとなじる。男には返す言葉もないが、それでも二人で丹波へ行った。このような物語を記したあと、襲った男の方は着物まで奪わなかったのが立派である、襲われた男の方は、山中で見知らぬ男に弓矢を渡したのが愚かであるという評価を下し、「其の男遂に聞えて止みにけり（襲った男が誰なのかは結局わからずじまいであった）となむ語り伝へたとや」と結んでい

この物語が収められている巻二十九は、悪行譚を集めており、評語は概して悪人の側に共感をよせている。この物語についてもその傾向に沿っているとは言えるが、それにしても、やはりとってつけたような評価という印象をもたらす。また、妻は、守ってくれなかったことをなじるわけではなく、事が収まったあとと夫のありさまに対する不満を言っており、これもまた奇妙といえは奇妙であるが、見知らぬ男に弓矢を渡

したことを以て愚かとする評語よりは、この物語の「本質」を衝いているようである。つまりこの話は、目の前で妻が犯された夫あるいは夫婦の話でなければならぬのに、原話はこの点について「本の男（＝夫）縛付られて見けむにかばかり思ひけむ」と同情のそぶりだけ見せて通り過ぎる。さらにこの夫婦はその後連れ立って旅を続けることになっているのである。こうしたことは、いわば心証が悪く、芥川にとつての原話が見す矛盾となりうるし、実際△藪の中▽は、プロットとして、原話が立ち入らない夫婦の危機を正面に据える。その際、夫を殺し、その殺された事情を「説明する」という方向をとる。しかも今度は、加える説明をも矛盾させるに到るのである。

事件のあらましが示されたあとで、賊、妻、夫の三人が三様の「説明」を行なう。賊は、妻が、「どちらか一人死んでくれ、二人の男に恥を見せるのは、死ぬよりつらい。どちらにしろ、生き残った男に連れ添いたい」というのに動かされ、夫と決闘してこれを殺した、その間に妻の方はいなくなっていたと、捕えられて「白状」する。妻は、その後、夫の目に「浮んだ蔑みの光に、心中するつもりで夫を殺したものの、自分はどうとう死に切れずに清水寺まで来た」と懺悔する。死んだ夫は、霊媒の口を通じて、妻が、犯された後で賊に自分の妻になれと言われてその気になり、夫を殺すように賊に頼ん

だが、それで賊は愛想をつかし、夫の方に妻を殺してやるうかともちかけ、その間に妻はどこかへ逃げ、自分は自殺したと語る。物語はそれで閉じられ、どれが真相かということは明言されておらず、その意味では作品内の「矛盾」は未解決のままになっている。

これを評して、中村光夫は「ある事実其三つの解釈を与えるのは、それを人の三倍考えぬことですが、ひとつの『事件』について事実が三つあるのは、考えの整理がつかぬといふことです⁽²²⁾」と述べる。それに対して福田恆存は

心理的事実もまた事実である。△中略▽この三つの「陳述」は現実の事実として矛盾してゐるが、もしそのいづれも現実の事実ではなく、三人が銘々さう思ひこんでゐる心理的事実に過ぎぬものだと解すれば、その矛盾は却つて主題を強調するものとして成り立つのではないか⁽²³⁾。

として、「事実、或は真相といふものは、第三者の目にはつひに解らないものだ」という主題を挙げている。さらに大岡昇平は、

ここで問題になっている「事実」とは現実の事実ではなく、作品の中に述べられている事実である。人物が一人称

で述べるので、福田がいう心理的事実という性質を持ち、同時に人物の性格描写の役割を果すものである。その中の事実を取つて現実の事実と同じように、すでに存在するものと比較すると、間違える。それは芥川が作品進行の必要から、そのように書いたものである⁽²⁴⁾。

としている。

ほぼ同じ頃に相継いで示されたこれらの三説が、もうひとつの△蘆の中▽を作っているかのようである。そして問題は、どれが正しいかということではなく、それぞれがそれぞれの根拠に基いて、この物語はこういう話だと言いうることそのことではないだろうか。

中村は「考えの整理がつかぬということ」と言うが、真相とか事実というのはまさしく「整理」され、その意味では虚構されるとさえ言えるものであって、一つの客観的事実などありえない——あるいは承認しえても確定できない。福田は「三人が銘々さう思ひこんでゐる心理的事実に過ぎぬ」として、別のところでは「現実の事実」なるものを想定さえしているが、その点では中村と同じく「整理」のついた事実を求めている。しかし、芥川がそういう「現実の事実」なるものを想定していたのなら、その上でそれを伏せたということは重視されて然るべきであろう。大岡にしても、「現実の事実」

であれば一義的に確定し、それと陳述との比較が可能であると考えているようであり、やはり八藪の中Vが示す事態の手前にとどまっていると言わざるを得ない。また大岡説では、芥川の「作品進行上の必要」は不分明なままになる。

おそらく中村説を逆説的にとるべきなのであろう。芥川は三人の登場人物のどの物語にも納得してはいないだろう。もはや八芋粥Vのようなこういふ話なら納得できるという物語ではなく、いずれにしても納得はできないという物語を書いたのではないだろうか。もし整理がついたとしてもそれもまた仮構にすぎず、銘々が語る陳述しか受け取りえないという事態を示しているように思われるのである。

いみじくも大岡は「結局のところ、このように優れた検察官（中村、福田のこと、引用者註）によって、五十年後になっても訴追される芥川龍之介は幸福であるといわねばならぬ」と言っている。²⁶大岡自身は弁護人の立場をとり、この論争を裁判にたとえているわけである。ところが裁判というものは、決して真実を発見する場ではなく、裁判官がなすうることは、左右の示す物語のうち、いずれがもっともらしいかの判定を下すことではない。あるいは両者から別の納得しうる物語を作ることである。判決という物語を含めた物語の受手たる者にとって肝腎なのは、ある物語を「人の三倍考え」

ぬき、示された物語以外の、ありうる物語を構想することである。それが芥川の再話の意味することである。何も「芥川の」と限定する必要もないであろう。芥川は、物語という行為に含まれる事態を、やはり物語という行為を通じて暴露するに到ったということではない。また再話だからということでもない。再話は物語の対象となる「事実」を、既に存在する物語に拠っているということであって、その対象が、未だ語られていない「事実」であろうと、夢であろうと、語り手の想像であろうと、物語という行為の本質には変わりない。ある物語が提示されているという「事実」までも否定するつもりは筆者にはない。ただ、語られていない事実は無意味であるというばかりである。

注目すべきは読者かつ作者としての芥川である。芥川がここで触れた八芋粥Vや八藪の中Vでも、『今昔』のみならずいくつかの外国の文学作品を粉本としていることは、諸家の明らかにするところである。おそらく芥川にとっては、そうした種々の物語もまた、「現実の」世界と同等の世界であったのであろう。例えば小堀桂一郎は芥川を次のように評している。

芥川という人は、八中略V読書人的教養の上にその文学を築いていった人であった。作家がその制作の直接の材料

を自分の体験・見聞の中に求めるのは改めて言うまでもない自然の勢である。ただその取材の範囲が芥川ほどにより多く書物の中での体験にむけられていた作家は少ないであろう。⁽²⁷⁾

また三好行雄は「芋粥」について、「それはまだ告知の文学にとどま⁽²⁸⁾っている。龍之介は見者の座から一步も動こうとしない(傍点原文のまま)」と言⁽²⁹⁾うが、その通りであろう。しかし「見者」なればこそ見えることもある。吉本隆明は、『或阿呆の一生』の中に、ヴォルテールの名が出て来るのに異和感を表明しつつ、

だが芥川はヴォルテールの思想が問題ではなかったのだ。人間の生涯に出あうことはどれも相対的なもので、のめり込むよりも冷静に眺めて揺れないの⁽³⁰⁾がいいと囁やくものならば誰でもよかったのだ。

という。△大導寺信輔の半生▽で、「彼は人生を知る為⁽³¹⁾に街頭の行人を眺めなかった。寧ろ行人を眺める為⁽³²⁾に本の中の人生を知らうとした」と言う芥川であれば、おそらく自分の見たことを語るにあたって、言葉を与えてくれるものなら何でもよかつたとさえ言えるかもしれない。

しかしこれらの評言は、必ずしも芥川に対する否定的評価を意味するわけではない。物語を読み、それが示す世界を解釈するのに他の物語をもってするというのは、あらゆる物語の受け手と語り手に認められるべきことである。もともと人間が物語という行為を通じてコミュニケーションを行なうからには、多かれ少なかれ何らかの典拠は不可欠であり、何をどういう形で典拠とするかが語り口というものだ⁽³³⁾とさえ言えよう。その点でも芥川は物語という行為の構造を顕在化している。

今受け取った物語が、他の物語を介在させることで、別の物語として再生しうるなら、そうすべきでさえあり、それこそ「見者」のな⁽³⁴⁾じうることである。受け取った物語を、単に「そういう物語」のままにしない⁽³⁵⁾ということは、常に物語を受けて生活している者にとっては不可欠のことである。告発者や行動者となる前に「見者」たらざるをえないのである。

しかし、他の物語を構想する⁽³⁶⁾ということは、一方で妄想の危険をもはらんでいる。整理しえない「事実」という物語の△藪の中▽が書かれた大正十年⁽³⁷⁾というのが、芥川の精神面での病状が顕著になった年であった⁽³⁸⁾ということは象徴的である。それでも歴史、報道、ルポルタージュといった物語を通じて世界と接することが多く、すべての情報の真偽を直接確かめることができるわけではない者としては、納得がゆくとい

うことで望ましい「真相」のみを受け容れてしまわないために、「見者」でもあらねばならないであろう。物語論において求められるのは、語り手の戦略よりも読み手の戦略なのである。我々は、二重の意味で歴史を作っている。一方では、時間が埋められるべき空白として我々の前に横たわっているのではなく、言わば埋めようとする行為こそが時間を形象しているという意味であり、他方では、過去を絶えず語り直し、語り直された過去についての物語を受け取ってゆくという意味である。そしてこの語り直しという行為がそのまま時間を形象する行為になっている。過去はくつがえせない「客観的事実」の集積ではなく、未来の領域にも属しているのである。そしてその意味では、常に更新され、あるいは改ざんさせられるということを率直に認めなければなるまい。だからこそ読み手の戦略、すなわちあらゆる物語を「藪の中」に入れてみることが必要となる。そしてこの戦略は、時間を自らの手許から逃さないための戦略に他ならないのである。

註

(1) 例えば△羅生門▽や△鼻▽といった他のよく知られた物語が、心理描写やエピソードの面で原話にはない部分を多く補なっているとしても、物語としての趣にさほど違いがあるわけではなく、その意味ではよくできた習作といった感がある。それに対して

△芋粥▽や△藪の中▽の方は芥川における物語という行為の特質を鮮明にするだけの改変を伴っている。

(2) テキストは小学館刊の日本古典文学全集版を用いたが、引用にあたっては、表記を適宜改めた。

(3) 『澄江堂雜記』中の△昔▽による。

(4) 勝倉壽一『芥川龍之介の歴史小説』（昭和五十八年、教育出版センター）七五頁。

(5) 原話は利仁について「常にかの国（＝越前国、引用者註）にぞ住みける」と説明している。

(6) 和田繁二郎『芥川龍之介』（昭和三十一年、創元社）五二頁。

(7) 関口安義△羅生門・芋粥▽、『批評と研究 芥川龍之介』（昭和四十七年、芳賀書店）、所収。

(8) 同前。

(9) 三好行雄『芥川龍之介論』（昭和五十一年、筑摩書房）八七頁。

(10) 芥川は、五位の人物描写のところで、無位の侍という青年を登場させ、仲間の迫害に対して「いけぬのう、お身たちは」と言う五位を見せ、「この無位の侍には、五位の事を考へる度、世の中のすべてが急に本来の下等さを露すやうに思はれた」としている。

(11) 勝倉、前掲書八三頁。

(12) 同前、八四頁。

(13) 三好は「龍之介が史料のなかに読むのは、茫洋として流れた歴史の動態でもなければ、特定の時代の歴史性と相対化された人間の運命でもない。むしろ逆に、時間の系に閉じられた人間のドラマに確実な△現代▽を発見したとき、かれの歴史小説ははじめ

て成立する」(前掲書八一頁)としている。

(14) 八芋粥の三年後、志賀直哉は八小僧の神様を、ほぼ似たような構図で「現代」の、それも利仁側の話として書いている。

(15) 原話は「利仁馬の腹に落下りて、狐の尻の足を取て引き上げつ」となっているのに対して、八芋粥では「やがて利仁が、馬を止めたのを見ると、何時、捕へたのか、もう狐の後足を掴んで、倒に、鞍の側へ、ぶらさげてゐる」となっている。

(16) 原話の狐に伝言を与えて放す場面で、「広量の御使哉(頼りない御使ですなあ)」という五位の疑問を記しているが、芥川はこの「広量」を「雄大な」の意味に用いた上で次のように記す。

五位は、ナイヴな尊敬と讃嘆とを洩らしながら、この狐さへ頼使する野育ちの武人の顔を、今更のやうに、仰いで見た。

自分と利仁との間に、どれ程の懸隔があるか、そんな事は、考へる暇がない。唯、利仁の意志に、支配される範囲が広いだけに、その意志の中に包容される自分の意志も、それだけ自由が利くやうになつた事を、心強く感じるだけである。——阿諛は、恐らく、かう云ふ時に、最も自然に生まれて来るものであらう。

(17) 清水康次「鼻」「芋粥」論——「解釈」という方法にふれて、『国語国文』昭和五十五年十号所収。以下に引く清水の見解もこれによる。

(18) 例えば八鼻なり八芋粥なりの作品は物語という行為の結果として成つた産物であつて、決定稿を書くということ、あるいはテキストそのものが語るといふことではないことを念のため付言しておく。

(19) 八鼻の原話(『今昔』巻二十八の第二十)も、禅智内供の

鼻が短かくなつたときに人々がわらつたということは記していない。

(20) 八鼻の原話では、内供の鼻に陰で雑言を吐いた童に対して、「童のいとをかしく云ひたる事をぞ、聞く人讃めけるとなむ語り伝へたるとや」という結びになっている。

(21) 無論八運においても成立するであらう。作者が一人称では登場しなくなるといふ手法の変化はまた別の問題である。

(22) 中村光夫「藪の中」から「すばる」昭和四十五年六月号所収。

(23) 福田恆存「藪の中」について『文学界』昭和四十五年十月号所収。

(24) 大岡昇平「芥川龍之介を弁護する」『中央公論』昭和四十五年十二月臨時増刊号所収。

(25) 賊が男を刺して逃げたものの即死とはならず、妻は心中、夫は自殺を主張してもみあううちに、夫は傷がもとで死ぬという筋書が想定されている(福田 前掲論文)。

(26) 大岡、前掲論文

(27) 小堀桂一郎「芥川龍之介の出發と『諸国物語』」、『森鷗外の世界』(昭和四十六年、講談社)所収。

(28) 三好、前掲書九〇頁。

(29) 第十九節「人工の翼」。

(30) 吉本隆明『悲劇の解説』(昭和五十四年、筑摩書房)、引用は筑摩文庫版三二〇頁による。